The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2024 年度（春夏学期） 日本語Ⅱａ実践報告
Author(s)	金谷, 由美子
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 61-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102684
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2024年度（春夏学期）　日本語Ⅱa実践報告

金谷 由美子

1.　授業の概要と目的

本稿は、2024年度春学期の日本語Ⅱaの授業実践の報告である。日本語Ⅱaでは、講義題目を「日本語の副詞」とした。日本語の副詞の中には、外国語への翻訳が難しいもの、学習者にとって習得が困難なものがあることが知られており、また、研究も十分に尽くされているとは言い難い。そこで、副詞研究でも知られる渡辺実氏の著作である（2001）『さすが！日本語』をテキストとして選択し、各章で扱われている日本語の副詞について、受講生全員がテキストを読み、各自選択したトピックについて、順番に発表するという形式の授業を行うことにした。

今年度はさらに、渡辺（2001）のトピックから選んだ副詞について発表だけでなく、別の学生が、自分が関心のある副詞を選び発表する構成にした。学期中ひとり計2回の発表を行うことになる。残り時間では、講師による解説を行う。

これによって、①受講者が日本語の副詞や日本語文法に対する知識を深め、自らの目標言語である日本語に対する探求心を持つこと、②受講者が日本語の副詞が現れる文と母語を比較対照することを通して、自らの日本語学習者としての経験を生かしつつ、能動的かつ批判的に論文を読むこと、③研究課題を自ら見つける力をつけることを目的とした。

２．学習目標

①日本語について言語学的な視点から書かれた文章や論文が読めるようになる。
②日本語の副詞について、何が問題になっているのかについて知り、また、それについて議論ができるようになる。
③自らの日本語学習を振り返り、今後の研究や日本語学習に役立てることができる。
④自分の考察や意見をまとめて口頭で発表できるようになる。
⑤自分の考察をまとめて小論を書くことができる。
⑥自分で研究テーマを探すことができる。

３．教材選択について

副詞を扱うにあたり、テキストとして渡辺実(2001)『さすが！日本語』を選んだ理由は、①単語別に章分けされており、用例も豊富で、授業で日本語の副詞をひとつひとつ扱うのにうってつけであること、②一般向けに書かれた新書であり、専門用語があまり使われていないため、言語学を専門としない学生にも読みやすいこと、③著者の渡辺実氏が日本語の副詞研究において重要な研究を残しており、20年以上たった今でも、読むに値する分析がされていることである。その上で、④記述しつくされていない部分に気づく余地もあり、学生が自分でテーマを探す助けになると考えた。

テキストにある説明や議論は必ずしも受講生にとって平易であるとは言えないが、日本語の学習者として、あるいは、将来、翻訳・通訳、語学教師など日本語を活かした職業に就くうえでも有益であると判断した。

４．授業の進め方

授業の形態
【毎週の課題】10回程度予習課題をGoogle Formsで提出（用例の母語への翻訳、適格性を問う問題等）
【授業の前半】は、受講生２人、または3人による発表。（各章のテーマ、あるいは、自分で選んだ副詞について口頭発表の準備）
【授業の後半】は、講師による補足説明、事前に提出した翻訳課題を見て考察を行う。
【学期末課題】授業で扱った項目、または、日本語学習者として関心を持った文法項目について小論（2000字程度）を書き提出する。

表１　授業で扱ったテーマ

1	ガイダンス（渡辺2001の副用語とは） 講師による講義形式 せめて「せめて１年は」
2	やはり、やっぱり 「やっぱりコーヒーにします」
3	どうせ「どうせ行くなら」 まったく

4	せっかく「せっかくパリまで」 どうも
5	いっそ「いっそあのとき」 あたかも
6	とても、とっても「とても 80 とは」 敢えて
7	もっと、「もっと光を」 ずっと
8	よほど、よっぽど「よほどお酒が」 いざ
9	多少、「多少生意気な」 結構
10	もう「もうこの世に」 めっちゃ
11	まだ「まだ 100 票ぐらい」 ※慣用句について講義
12	いま、「いま若い女性の方が」 普通に
13	さっき「さっきの自慢は」 なお、いかに
14	つい、ついに、ついぞ「ついうっかり」 ちょっと、到底
15	ずいぶん「随分正直な」 いちおう

表内のテーマは渡辺（2001）の各章の用例等からとった。

５．受講生の反応と今後の課題

今年度の受講生はタイ語母語話者 1 名、韓国語母語話者 1 名、中国語母語話者 12 名の総勢 14 名である。

発表も提出課題もまじめに取り組めていたと思う。日本語のレベルも総じて高く、完璧な日本語に近い学生もいる。

Google Forms による予習課題では、主として渡辺（2001）の用例を母語に翻訳するほか、適格性判断を問う選択問題等を課した。提出された予習課題の内容を授業の後半で講師が発表する形で共有することによって、発表担当者以外の授業参加度を高めることに努めた。

日本語だけで議論を進めるのではなく、共通の外国語である英語や、受講生の母語である中国語や韓国語、タイ語と対照させることにより、言語間の副詞の扱いや類似単語の意味の違いに対する気づきを促すよう心掛けた。

当該単語の母語との対照によって、一定の関心を引き出すことができたのではないかと考える。実際に日本語の副詞が他言語では何通りかの訳語（または訳出ができない）に相当することを観察することにより、日本語の副詞に対しても、自らの母語に対しても知識を深めることができたのではないかと思われる。用例を単純に翻訳比較するだけでも多くの気づき、知見が得られることがわかってもらえれば、この授業の目標は概ね達成できたと考える。

期末レポートは、大半の受講生が母語と日本語の対照研究を行った。指示通り、具体的な用例を挙げて論じることができた。分量は 2000 字程度以上とし、書きたい人は書きたいだけ書くという方式にした。

今年度は 14 人だったので、人数の多かった去年とは異なり、発表も例年の 2 回に戻した。反省点としては、中国語母語話者が多いために、どうしても中国語との対照が中心になってしまう点である。他にも、毎週扱う副詞が異なるので、各項目の内容に興味を持っても、じっくり考えて深める時間が取りにくかったかもしれない。毎回異なる副詞を扱うため、深めることが難しい一方で、二人ずつの発表で、どちらも同じ内容では、学生にとっては少々退屈という面もあるかもしれない。今後は、一人には渡辺（2001）の副詞、もう一人には、別の副詞についての発表を課すのもいいかもしれない。翻訳が難しい日本語の副詞の数は多いので、存在に気づくことに意義があるだろう。

今後、受講生がこの授業で得た日本語や母語の副詞、語彙や文法に関する気づきを日本語の学習や研究に役立ててくれることを期待する。

【参考文献・テキスト】

渡辺実（2001）『さすが！日本語』ちくま新書
※現時点で絶版のため必要箇所を配布